

## 島唄若手唄者の伝承意識

～地域のシマグチ・島唄の伝承の現状～

前田達朗

はじめに

ここで問題とするのは、伝統文化と地域言語の伝承にある種の「断絶」が見られることである。その原因となる可能性があるのは「老人と子ども」と言う伝承活動の現場ではよく見られる設定ではないか、と言うのが調査の出発点となっている。筆者はこれまで主に大島郡瀬戸内町で伝承活動の現場を経年的に見てきたが、特に少子高齢化の影響がより大きかったコミュニティでは、「受け手」である子どもがいなくなったことで伝承活動が終息したと言うように見られている<sup>1</sup>。確かに世界の継承の危機にある言語の維持・復興運動(maintenance, revitalization)の現場でも同様に若い世代への継承が目標となっていることが多いと言える。これら運動の効果、持続性を考えるとむしろ当然のことなのであるが、少なくともこの瀬戸内町の事例についてはそれだけでは説明できないと考えている。「送り手」が年長者、つまり高齢者であることをある種の「資格」だとしていると、世代交代がうまくいかなければ伝承活動を継続することは困難になる。さらに次の世代がシマグチを母語として獲得していない世代である可能性が高くなれば「送り手」も途絶するのだ。実際に瀬戸内町でかつて伝承活動に中心的に携わっていた人々は多くが高齢化し、もし子どもたちが地域コミュニティにいたとしても活動は難しいであろう。次世代の「送り手」を育てると言う視点が欠けていたと言える。シマグチが実際に使われる場面である地域コミュニティの伝統行事などに支障が出てきている事例もある。<sup>2</sup>

奄美の島唄もまた地域に根付いた文化であるが、「唄者」と呼ばれる歌い手、特に広く演奏活動を行っている唄者の年齢構成には偏りがあると言える。地域の伝承活動と直接結びつくかどうかは今後の調査が必要だが、島唄の現場では「伝承」の担い手がいきなり若い世代の責任になりつつある。

本稿では大島郡瀬戸内町出身であり、現在も同町を拠点に積極的な演奏活動を展開している若手唄者へのインタビューを軸に、同町と奄美大島・群島の島唄の現状から見る「伝承」について考えることで冒頭にあげた「断絶」について考えていくことになる。

また順番が前後したが本項では奄美の地域言語を「シマグチ」、琉球と共通の楽器を使うが和音階で歌われる奄美群島北部の音楽を「島唄」とする。

### 1 島唄とその伝承をめぐる状況

これまで筆者は「シマグチ」そのものの伝承活動に注目してきたことは既述したが、そのピークと終焉と言えるものを2000年代の初頭からの10年ほどで瀬戸内町で見ることにな

<sup>1</sup> 前田(2006)

<sup>2</sup> 前田(2019)

った。その終盤とも言える段階で1つ顕著な変化があった。シマグチだけでの活動が限界をむかえ、伝統芸能、特に島唄との言わば「抱き合わせ」のような活動が増えてきた。1994年から続いていた町主催の「子どもシマグチ大会」が2006年「シマグチ芸能大会」へと名前を変えたことにも象徴的であった。<sup>3</sup> これはシマグチ教室の中だけでしか使う機会のないシマグチに子どもたちの興味を惹きつけることへの限界があったからだということは間違いない。これは奄美や瀬戸内に特別なものではなくあらゆる言語復興運動のもつ共通の課題であると言えるが、限界のある時間や労力の中で「達成感」を得られるのは、大会のためにやらされるまる覚えのスピーチよりも歌や踊りの方が子どもたちにとっては楽しいことは間違いないであろう。

しかしこうした言わば消極的なものだけが子供達の島唄への接点になっているのではない。小中学生の数がこの20年で半分になった<sup>4</sup>瀬戸内町でも、シマグチを習いたいと言う子どもはいなくなっても子ども向けの島唄教室は続いている。今でも聞く機会の多い島唄に惹きつけられる子どもはいるのだ。このことがすなわちシマグチの継承につながると考えるのは短絡的にも見えるが、「歌の中に言葉が preserve される」<sup>5</sup>との認識も広く共有されている。島唄が歌い継がれる限りシマグチが消滅することはないとも言える。

言語を使う場としての歌、そして言語を伝えるメディアとしての歌の役割を念頭におきながらインタビューを含めた調査は行われた。

#### 1-1 調査の概要と調査の協力者

これまでの調査の中でもさまざまな形で島唄の歌い手～唄者との接触はあったが、島唄とその伝承を中心に調査を行なったのは2020年2月から2021年12月にかけて、現地調査とメールやSNSのメッセージ機能などを用いたものである。この調査での主な協力者は里朋樹（さとともき）氏である。里朋樹は1990年瀬戸内町生まれで、7歳から島唄を始め、11歳で「奄美民謡大賞」少年の部で優秀賞、翌年には最優秀賞を獲得し2003年にはソロCDが発売されている<sup>6</sup>。大学進学を機に大阪に移り関西を拠点に島唄の演奏活動を始めたが、同時に奄美出身者とともにバンド活動を行いアレンジを変えた島唄のパフォーマンスもライブハウスや各地のイベントなどで披露している。妹の里歩寿（ありす）も同じ大学に入学し、卒業した今も兄妹での活動にも力を入れている。2017年から地元瀬戸内町の町役場に勤務、古仁屋を拠点として全国でライブ活動を行なっている。

#### 1-2 「若手」と言われる唄者

島唄の唄者は厳密に言うとプロではない。それぞれ生業を持ちながら演奏活動を行うの

<sup>3</sup> 前田(2017)

<sup>4</sup> 前田(2017)

<sup>5</sup> 2015年の”Foundation for Endangered Languages”(FEL)の14回大会は”The Music of Endangered Language”のタイトルで世界各地の危機言語復興活動の中での音楽の役割が報告されており、琉球諸語では原田の与那国の事例が紹介されている。Harada(2015)

<sup>6</sup> [http://www.simauta.net/sato\\_tomoki.html](http://www.simauta.net/sato_tomoki.html)

が伝統的な形態である。演奏や人に教えることでの対価を受け取ることは許されている。元ちとせや中孝介のようにプロのミュージシャンとして活動しているのはむしろ新しい形であるが、彼らも島唄ではなくポップスの歌手として生計を立てていると考えられている。従って「唄者」とそうではない言わば愛好家を分ける境界線は難しい。唄者と認められるのは「大会」に出る、演奏活動をするなどの過程を経て周囲の人々、特に唄者から認知される、認められると言うことになるようである。ただそういう表だった活動はなくとも歌を愛し「うまい」と認められれば唄者と敬意を込めて呼ばれる。

「大会」と言うのは「奄美民謡大賞」と呼ばれる年に一回開かれる南海日日新聞社主催の1980年に始まったコンクールである。奄美、喜界島、徳之島、関西、鹿児島、関東で予選会が開かれ、本選は毎年5月に行われている(2021,2022は中止)。この予選会の会場が奄美の島唄の広がりを見せていると言える。同じ奄美群島でも沖永良部、与論では琉球音階の島唄が歌われていること、移住者が多い関西や鹿児島でも島唄が盛んであることがわかる。ただ奄美大島、喜界島、徳之島以外からはこれまで優勝者は出ていない。唄者にとっての登竜門とも言えるこの大会であるが、この予選にまず出れるレベルの歌を唄者を目指す人々は要求されることになる。そのほかにも日本民謡協会の協会員を対象にしたコンクールなどもあるが、奄美民謡大賞がもっとも権威の高い大会とされている。

奄美のコミュニティのサイズを考えると唄者と認められる人は多いといえよう。その中でも20代から40代前半までの「若手」でライブ活動やメディアへの出演、音源の制作や配信を積極的に行なっている者は10名程度に代表されると里朋樹は認識している。さらにそれぞれの範囲で活動している者も多く、かつては活動をしていたが中止もしくは現状がわからない唄者も少なくないという。才能があっても唄者であり続けることは厳しい。

里朋樹は阪神間や東京圏だけでなく全国でライブ活動を行なっている。これは奄美群島内だけでは機会に限られると言うことだけでなく、島唄を聞く人々が奄美に直接由縁がない人々にも拡大していることも手応えとして感じている。

### 1-3 島唄の現況

はじめにで述べたようにこの「若手」と呼ばれる唄者たちの上の世代に唄者が少なく、60代や70代の人々と直接つながっていると言える。里朋樹もその点については同様の見方をしている。なぜ現在の50代や60代に唄者が少ないのかの理由は里朋樹にもわからないとのことである。そのほかの唄者や周辺の愛好家や関係者にも聞いたがはっきりとした理由はこれまでのところわかっていない。豊山(2013)でも1960年代生まれの「唄者」がいないことを指摘している<sup>7</sup>が、唄者であることの基準を豊山は「セントラル楽器」でCDを発表しているかどうかにおいている。奄美島唄専門のレーベルである「セントラル楽器」<sup>8</sup>は1956年からレコードを発売、カセットテープやCDと様々な唄者の作品を発表してきたが、2012年を最後に新作のCDを発売していない。同年から既存の作品と楽曲をiTunesで配信を始

<sup>7</sup> 豊山宗弘(2013)

<sup>8</sup> <https://ritokei.com/culture/1302> に詳しい

めた。かつてはセントラルからレコードやCDが発売されるのは唄者にとってステイタスであったのだが、発信の方法が楽曲や動画の配信へと変わったのは他の音楽シーンと連動している。島唄を「民謡」と言うジャンルにあると考えれば、その聞き手は比較的高齢者であると考えられるが、奄美島唄についてはデジタルな媒体へとシフトしていると言えよう<sup>9</sup>。

また奄美では三味線やティディン（小太鼓）などの楽器を作り販売する店や職人の数が減り、沖縄や関西の店で購入や修理をしている唄者もいる。技術や経験が必要な分野でもあり、この傾向を押し留めることは難しいと思うが、初心者が楽器を手に入れにくくなることが問題だと里朋樹も考えている。見落とされがちな視点であるが、島唄を維持する大きな部分として意識されなければならないだろう。

#### 1-4 「若い」世代への眼差し

これまで述べてきたように若手唄者の言わば親世代に現役の唄者は少なく、祖父母の世代の次は「若手」である。このことにいい・悪いなどの評価がなじむとは思えないが島唄の主体が遠からずこの世代になることは間違いない。そして次の世代に島唄を伝承する役割を担うことにもなる。世代から世代へ長い間歌い継がれてきた島唄にとってはベテランがいないことは初めての経験になる。言うまでもなく奄美の地域社会も年長者が力を持ってきたコミュニティである。若手の唄者はその状況をどのように捉えているのだろうか。

里朋樹は自身の島唄を指し「曲げている」と評している。これは自身の解釈を付け加えてオリジナリティを出しているという意味である。それを若者や子供達に教えられる、あるいは教えていいものだとは考えていないようである。今の自分には教えられないとも言う。かつて子供の頃に自分が最初に教わったようにやはり教えるべきは「昔からのもの」と考えている。

しかし地元に戻り町役場に勤務している彼は町内の小学校に行つて言わば「出前授業」を年に何度か行なっている。子供達には「楽しさを伝えたい」と考えている。自分の話が島唄への興味の入り口になればと引き受けている。里朋樹は何年もかけて自身のパフォーマンスのスタイルを築いてきた。ただ歌うだけではなく話術も磨き、それが評判となり様々なイベントに呼ばれている。公務員であること、奄美に拠点を置いたことはライブ活動を続ける上で決して有利ではないと考えるが、確実にアーティストとしてのキャリアを積み重ねていると言えよう。1-2で触れたような現役で演奏活動をしているような「若手」は今まさに自身のスタイルを作り上げている過程であると言える。また自分たちは年配の指導者に教えられた経験のある世代である<sup>10</sup>。自分が指導者になるというのはまだ考えられないようだ。

また自分たちより若い唄者たちについて思うのは「決まった歌しかできない」と言うことである。コンテストに向けて決まった曲を徹底的にやるのだが、広く色々な歌を覚えようと教えられ、今も同じ歌でもほかの人があまり歌わない歌詞<sup>11</sup>を歌おうとするのだが、うまい

<sup>9</sup> 奄美市名瀬にあるセントラル楽器の店舗ではこれまで発売されたカセットとCDは引き続き売られているが、在庫分だけで再プレスされることはないとのことである。

<sup>10</sup> 里朋樹は古仁屋の伝説の唄者中野豊成の最後の弟子と言われている。

<sup>11</sup> 奄美の島唄の歌詞は定番のものはあるが、よく歌われる歌ほどたくさんの歌詞が伝えら

など思っても数曲しかレパートリーがない若者が多いと言う。コンテストでの入賞を目指してそういった指導法になっているのではないかと里朋樹は懸念している。

このようにまだ自分が「教える」ということに現実感はないが、島唄の伝承については意識している。ただ里朋樹だけでなく、自身が唄者としてさらに上を目指したいと考えている若手唄者にとって「教える」立場になることには戸惑いもあるだろう。

#### おわりに 伝承の伝承

はじめにでも述べたが、2000年代初頭をピークにシマグチの「子供向け」の教室が集落単位で盛んに開かれていた。その後これらは急速になくなるのだが、子供がいなくなったことが主な理由とされており、そのこと自体は間違いではない。そしてその頃から全く議論されなかったのが成人向けのプログラムであった。繰り返しになるが次の世代の指導者という考え方は欠けていたのである。シマグチを「教える」ことが動き出したのは奄美では90年代であったが、よく言われたのは「子供たちがシマグチがわからない」から、というものだった。ではその時の「おとな」はシマグチがわかっていたのか、というとそこは触れられずにいた。「シマグチは年寄りのもの」という認識は未だ強い。言語調査などでも「70代以上の話者」といった言説は何年も使われている。しかし何年か経てば彼らは確実にいなくなる。子供が少ない、少なくなる焦りはあっても、話者がいなくなることについて、つまり教えられる人がいなくなることについては地域社会では想像しにくかったのである。「子どもと年寄り」という組み合わせ以外に考えてこなかった結果が現状であろう。そしてシマグチ伝承活動の結果シマグチができるようになったという話は聞かない。数少ない若い話者は祖父母と同居していた、などの特別な環境でしかありえない。

島唄も大人になってから始める人がいないわけではない<sup>12</sup>がやはり少数派である。瀬戸内町でも成人むけの教室はあるが、移住者の参加が多いとされている<sup>13</sup>。伝統的なものは年寄りのものという意識が地域社会全体にあることは否めないだろう。

50代60代に見られる「断層」が生じた理由についてはさらに検証する余地があるが、この層を今から埋めることはできない。島唄の伝承を考えるのであれば「若手」と今でも呼ばれる層がこれまでになかった新しい構造を理解し、自分たちが伝承の主体であることを自覚することが島唄の存続のために必要である。シマグチで見たような「年長者への丸投げ」で伝承が途絶することがあってはならないと考える。今回は現地調査が難しかったため難しかったが他の唄者への調査が必要なことは間違いない。今後の課題である。

---

れている。元来は即興・掛け合いであった名残である。

<sup>12</sup> 例えば里朋樹の母親は子どもたちが教室に通い出したことをきっかけに自身も習い始め今でも島唄を続けている。

<sup>13</sup> 里朋樹とのインタビューによるが未確認

## 参考文献

- 加藤晴明(2018) 「奄美島唄という文化生産： 島唄の教室化をめぐって (1)」『中京大学現代社会学部紀要』 12 卷 1 号
- 豊山宗弘(2013) 「奄美島唄の継承活動における唄者と民謡大会の役割」『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』 15 号
- 前田達朗(2006) 「奄美大島瀬戸内町における『シマグチ』伝承活動-ひとびとの言語意識のてがかり」『多言語社会研究会年報4号』 三元社
- 前田達朗(2017) 「将来の『教材化』を目指した言語資料のコンテンツについての考察～ 奄美大島瀬戸内町での事例を通して」『(平成 28 年度) 危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』 琉球大学国際沖縄研究所
- Harada Soichiro(2015) *The Standardization of Traditional Yonaguni Songs* FEL16 “The Music for Endangered Languages N.Ostler & Brenda W.Lintinger FEL

